

授業概要

世界の統計や年鑑の類を見ると、ほぼ例外なく、日本は仏教国ということになっている。たしかに、日本の歴史やさまざまな文化を思い起こしてみると、仏教を抜きにしては語れない。精神面でも物質的にも、多くの物事が「仏教」を構成要素にもっている。しかし実際には、そのことはほとんど理解されていないといえる。己を知ることなく、異文化の理解を唱えるなど軽佻浮薄ではあるまいか。まずは「日本」を知ろう。その一端あるいは導入として、伝来から平安末期までの日本仏教史を講義する。

授業計画

おおよそ以下のような内容と順序で進める予定だが、途中で多少の変更を生ずるかもしれない。

第 1 回	ガイダンス（講義の進め方、仏教史を学ぶということ）
第 2 回	仏教とは何か、日本仏教とはどういうものか
第 3 回	仏教伝来以前に見られる宗教的思考
第 4 回	仏教の伝来と公伝年次の問題
第 5 回	仏教の定着、浸透（推古朝から大化改新前後まで）
第 6 回	国家仏教の芽生え（天武・持統朝）
第 7 回	律令制的仏教のあり方と南都六宗
第 8 回	知識集団の活動と民間菩薩僧
第 9 回	国分寺の建立、大仏の造立、百万塔の制作
第 10 回	最澄と日本天台宗の開創
第 11 回	空海と真言密教の導入
第 12 回	摂関体制貴族社会と仏教
第 13 回	浄土教思想の流布
第 14 回	院政期および平氏政権下の仏教
第 15 回	いわゆる鎌倉新仏教の生まれる要因
第 16 回	試験を実施（定期試験期間中に筆記試験）

到達目標

全 15 回の内容を理解することが到達目標であるのは自明だから、あえて記すまでもないはずだが、
* 古代の日本において、どのように仏教が展開していったか、その流れをつかむ
* もともと外来宗教であった仏教が、現在の我々にどう影響しているか、各自が考える
などができるようになることを期待する。

履修上の注意

* 高校日本史や「日本史学入門」で学ぶ程度の常識的史実は習得していること。
* 教科書は用いないから、毎回しっかり聴講してノートをとること。「あとで…」と思わず、「あとと化物ア出たことアない」という江戸の格言を肝に銘ぜよ。
* 歴史という学問の一部である以上、一つ一つの事物に対する史的評価を語ることになるが、それを以って何らかの宗教や信仰を、推奨したり批判したりするものではない、という点を了解していること。

予習・復習

【予習】シラバスおよび予告に従って、次回に話題となる時代・時期の歴史を確認しておく。
【復習】必ずノートを読み返して整理する。必要に応じて参考書をひもとき、各自補足する。

評価方法

期末に実施する筆記試験（60 分、100 点満点）によって評価する。出題形式は、短文で答える記述式で 20 問もしくは 25 問（つまり、回ごとに重要な点を 1~2 題ずつ問うような感じ）とする予定。
配点比率：学期末試験 100%

テキスト

【教科書】使用しない。
【参考書】通史的なものを初回に紹介するので、できれば入手して、目を通すとよい。
また、各回ごとに個別の文献を提示するが、それは適宜、取捨選択すればよい。